

いしじの前に

沖縄県立那覇西高等学校三年 座覇 結月

石に刻まれた数万の名が
静けさのなかに 確かな声を宿す
それは過去ではなく
今を生きる地層に埋もれた
命の記憶

かつてこの島は
空と大地を焼かれ
山も海も 人の声も
戦の渦に吞まれた
砲声は朝を抱き

炎は夜を追い詰め
沈黙だけが 生を繋いだ
母は子の口を塞ぎ

少年は銃を握らされ
老人も赤子も
ひとしく逃げ場を失った
軍令という名の 命令は
生きる意思よりも重く

自決は荣誉とされ
死すら 義務とされた
生還した者にさえ

「なぜ生き延びた」との声が
刃のように突き刺さった
戦を終えても

傷は癒えず
記憶は風化を 拒みつづける
平和の礎は語る
敵味方の区別なく
国籍を超え

すべての命に名を与え
人間の尊厳を取り戻そうとする
意思を

名は数字ではない

それぞれが
血をもち
声をもち
愛し 愛された存在であった
石の冷たさは
熱を帯びた問いかけとなり
訪れる者の胸奥を揺さぶる
なぜこの地に
これほど多くの犠牲者が刻まれたのか
命どう宝

それはこの島が生んだ
最も切実な祈り
その祈りに耳を澄ますとき
平和とは 静けさではなく
記憶を引き受け 行動を選びとる
不断の営みであると知る

いしじの前に立ち
名を見つめ
声なき声を聴く
風が渡り
空が広がる

沈黙の中に
真実がある
忘れぬ者にのみ
平和は語りかける
いしじの石は問う
汝はこの静けさを
守る者か
託される者か